走り読み文学探訪リバイバル(その11)

「父がしたこと」(WHAT DADY DID)

著者　ニール・シャスターマン/Neal Shusterman (C)1991(唐沢則幸訳)
くもん出版(1997.3.12発行)1,400円(316p)

紹介者：榎本博康

［紹介］

この話は事実に基づく。

プレストンは11歳。フットボールと陸上が得意だ。でも大好きな両親が最近は果てしなく喧嘩を続けている。パパとママは14歳の時に知り合い，そのまま18歳で結婚したというのに。そしてそれは1984年の３月に起こった。パパがママを撃ち殺したのだ。

僕と弟はおじいちゃんの家に引き取られた。おじいちゃんとおばあちゃんは，ママの両親なのだが，パパを許し，刑務所から出る日を待つ。1986年12月に，模範囚であったパパは刑期を早めて出所。そして帰ってきたパパと，もういちど家族を作り直そうとする。

［感想］

この本は小学校上級以上のための児童書である。プレストンが事件を経験した，11歳程度以上を対象としている。この年代向けの良書は乏しいので貴重だ。

さて，ランニングに関する所から始めたい。プレストンは素質に恵まれていて，俊足である。だからフットボールでも彼が走ったら誰も追いつけない。おじいちゃんは陸上のコーチで，プレストンの指導もしてくれる。400㍍ハードルなどで彼は優勝する。そしてこの本の最後の場面は1989年１月だ。16歳の彼は200㍍走で，学校新記録の22秒2で優勝する。

これからがクライマックスだ。パパも高校では陸上の星だったのだ。誰も居なくなったトラックで競走することにしたのだが，「位置について」でいきなりパパが走り始めたので，彼は追いかけて20m位で並ぶと，スピードを落として併走する。何㍍の競走か決めてなかったから，そのまま走り続ける。その時，パパを許すのが良いとか悪いという考えを越えて，いっしょに走っていることを事実として受け入れる。そしてこの場面で話が終わる。

作者はどうしてランニングを結末に持ってきたのだろうか。ママを殺したパパを許す，これは心の深い葛藤を引き起こす。許すとか許さないとかを吹っ切って，パパが居て僕が居るということを自然な姿として受け入れられて，やっと家族が再生できる。それをゆっくりと二人一緒に走るという行為で象徴した。一緒に走ることは，人生を共にすることの暗喩でもある。

繰り返す。プレストンは母を失い，父親は殺人者になったので，自分の平静を保ち，近所や友人達の目に打ち克つために，スポーツで活躍して自己のアイデンティティを保ち続けることが不可欠だった。その彼が父親と競走でなく，共走するときに，父親を自然な関係として受け入れた。この走りの中で，プレストンは壁を乗り越えて，いや乗り越えるきっかけを得て，成長を遂げた。

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

さて，おじいちゃんとおばあちゃんはどうしてママを殺したパパを許せたのだろうか。「神のひとり子であるイエスを殺した人類を神は許した。娘を殺した男を許せないはずがない」とのキリスト教思想が，その背後にある。しかし，そこに彼らの進むべき道を見いだしたとしても，実行するのは困難だ。人間として，心を苦しめられないはずはない。そこを語るのが本書の重要なプロットであり，読んでいただく外はない。

このパパとママは初恋が実って結婚したのだが，悲劇の始まりでもあった。人生経験の浅い男女がそのまま結婚し，30歳を過ぎても美貌を保ったままのママは，若いときからの自分の賛美者であるパパにもの足りなさを感じ始め，今の自分は本来の生活をしていないと思う。美貌といえども年齢的にはラストチャンスとばかり，フットボールの花形選手とつきあう。

初めの恋愛のときは，王女様と騎士でも良いが，生活はそれではできない。それなのに，３０歳を過ぎても彼らはその関係を続けていたようだ。そしてまともに離婚なり，和解なりの話をすることもできず，ただ長々と諍いを続けて自分達と家族を苦しめ，この事件をもたらしてしまう。

この話で目につくのは，パパとママの幼児性とプレストンの成長である。おじいちゃんとおばあちゃんは立派すぎて私には理解できない。できないけれども，少しでも近づきたいと思う。これを奇跡とは呼びたくないからだ。

(1998.1.15)

[リバイバル感想]

あーあ、嘘くさいなあ、どうしてもそんな風に思ってしまう。母親殺しの父と共に生活するという苦痛に耐えなければならない理由なんてあるんだろうかと。顔を見ないで済む生活を選べばいいんじゃあないか。初校を書いた自分がきれいにまとめているのも、気に入らない。どう書くか、とても困ったことを思い出した。

この話はプレストン少年の心を描くものだとは言え、そこが作者の狙いとは言え、父の心は描かれなさすぎる。一緒に走って心の和解の端緒というのは綺麗ごとすぎる。

どうして許す、という問いかけになるのか。許さない生き方もあってもいいではないか。許すべきだとの問いかけこそが、プレストン少年を苦しめるのではないだろうか。

プレストンは、自分の行為が引き起こしたものではないのに、一生苦しみ続けて、自らの死の間際にでも心を鎮めることはできないのだろうか。自分の中に加害者と被害者が同居する感覚は、時間と共に消えるとか消えないとかいうものではなく、それが自分であることに他ならない。それでもプレストンは前向きに克服していくだろう。しかし彼の心の沼の最下層に溜まった泥は、いつまでも眠り続ける。

小説家は走りを便利に使わないでほしい。

[2020.6.20]

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.